

# 学問としての比較文化論の構築

藤田昌志著

日本の中国観Ⅱ

比較文化学的考察

佐藤 利行



A5判 210頁  
 晃洋書房  
 [本体 2600円 + 税]

中国からの留学生の多くが研究のテーマとして取り上げるのが「○○の比較文化的研究」「○○における中日比較文化論」といったものである。ところで「比較文化論」とは、いったいどのようなものであるのか？ 筆者はその点に触れて解題の中で、次のように言う。

比較文化論も比較文学のヨーロッパ型、アメリカ型の相違のように、影響関係を比較するものと、なんであれ制限をつけずに「比較」するものに大きく分かれるようである。比較文化論には一つのアポリア（困難点）が存在する。それはその比較文化論の言説が客観的に正しいと言えるのかどうか曖昧なこと、そこまで言うと言いきりであるとする、曖昧性を含む危険性を持っているのである。また、比較文化論の著者は研究者でなく、留学経

験者や評論家であることが多く、根拠のない印象批評、個別的感想であると思われることが多いことも、比較文化論の曖昧性を助長している。

筆者の言う「曖昧性」こそが、比較文化論を比較文化学としての学問たらしめることを妨げているように思われる。筆者は、

この比較文化論の曖昧性、客観性の欠如の危険性を克服するために、私は言語の対照研究、私の場合は日中対照言語学、日中対照表現を基礎に置きたい。なぜ日中対照言語学、日中対照表現を基礎において日中比較文化学を構築するのかと言うと、言語の対照研究が客観的な研究であり、言語の対照研究を基礎に置くことで恣意的な日中比較文化論が展開されることを防ぎ、客観性の高い日

中比較文化学が構築されるからである。

と述べている。比較研究を行うためには自らの確固たるディシプリンが必要であるが、筆者はそれを言語の対照研究として、見事に本書において「日中比較文化学」を展開する。

本書は、「通時的考察」と「共時的考察」とによって日本の中国観を通観している。通時的考察では、先ず第一章は原始、古代、中世、近世と日中の歴史を辿りながら、その時々における日本の中国観を概観する。読者は自らの知識、教養を確認しつつも、筆者が提示する新たな知見によって、読み応えのある考察となっている。続く第二章では明治・大正期の日本の中国観を「万国公法・固陋・尊崇・脅威・軽侮・小中華主義」をキーワードとして概観する。明治期では福沢諭吉・徳富蘇峰・勝海舟・中江兆民・岡倉天心・高山樗牛・石川啄木らを取り上げ、各人の中国観、或いは朝鮮観、アジア観といったものを特徴的に提示する。第三章は昭和から現在に至るまでの日本の中国観についての考察である。筆者が、明治・大正時代以上に昭和から現在を扱うことには困難が伴う。六〇代半ばの日本人でも日本の近現代史は学校でよく学ばなかったと言う。それは利害が生々しく関係し、一つの論を立てれば、すぐさま異論が立てられ、収

拾がつかなくなるから、できるだけ触れるのを避けようとするエトスが生じることによる。

と言うように、その時代の一部を共有する我々にとっては却って客観的な考察が出来にくい時代であるのかも知れない。しかし、本章においても「満州事変・殲滅戦略（決戦戦争）構想・以德報怨・中帰連・小中華主義」といったキーワードによって、読者の期待を裏切ること無く、筆者ならではのこの時代における日本の中国観を見事に我々に提示してくれている。

以上、本書の前半は原始から現代までの日本の中国観の通時的、歴史的考察である。殊に近現代における日本の中国観において筆者のあげる「小中華主義」は、或いはこれからの日中の関係を見て行くときにも重要な鍵となる言葉のように感じられる。

思うに、日本の中国への軽侮心は明治以来のもの、より古くは日本の小中華主義に由来するものである。日本には中国に対する対抗心、「負けじ魂」（徳富蘇峰の言った言葉）が存在し、それが強く出すぎると軽侮心になる。明治以降、日清・日露戦争を経て日本は近代化⇨欧米化を成し遂げ、アジアにもそれを成し遂げさせる使命⇨道義があると思ひ込み、アジア・モンロー主義とともに中国

へ侵攻していった。政治・軍事を中心とするのではなく、文化を中心とする中国観の新たな創出が今、必要とされている。そう思うのは筆者一人ではないであろう。

第二章のまとめに筆者が言うが、まさにその通りである。文化を中心とした中国観の新たな創出のためにも「日中比較文化学」の確立が重要であり、本書の果たす意義は大きいと言える。

本書の後半は「共時的考察」である。第四章では二〇一〇年九月～翌年八月、第五章では二〇一一年九月～翌年八月、第六章では二〇一二年九月～翌年八月、第七章では二〇一三年九月～翌年八月、の四年間の日本の中国観についての考察がなされている。それ以前の六年間については、前作の『日本の東アジア観』に収められている。

さて、この共時的考察において筆者は、それぞれの年ごとに日本で出版された中国関連書籍の中から日本の中国観として重要と思われるものについて、(1)社会関連書籍（政治・経済を含む）考察、(2)語学・文学・歴史・哲学関連書籍考察、(3)文化・比較文化関連書籍考察、(4)その他の書籍考察、に分類して分析、考察を行っている。こうした考察は従来では見られないものであり、その時々においては、まさにアップデート

デートな日本の中国観であるが、いずれは通時的研究の貴重な資料となるものである。第四章の「はじめに」で、筆者は述べる。

二〇一〇年九月に起こった尖閣列島漁船衝突事件では故鄧小平氏の尖閣列島領有権百年後決定、一時棚上げ論の知恵の片鱗も見られなかった。日本政府は司法権が行政権に介入するという奇妙奇天烈な「決定」によって漁船船長を釈放。この事件によって日中間に政治上の太いパイプのないことが露呈した。政権与党の転換が事件発生に拍車をかけた感がある。中国には歴史的に「人的関係」を重視する文化がある。西洋流の「契約」概念だけでは把握できない。日本が後ろ盾と頼む国に期待しても詮ないことである。本考察では、そうした時代の流れにも注意を払い、日本で出版された中国関連書籍を資料として現在日本の中国観を考察、分析し、明らかにしてみたい。

このように、後半の各章の初めには、その年の日中関係を概観し、キーワードを列挙してから書籍の考察を行っている。取り上げる書籍が各ジャンルにわたっているので、読者はその分類の範疇の中で前年あるいは翌年のものと比較してみることもできるし、同じ年の異なる分類のものを比較することも可能である。その点においても実に貴重な考察となっている。

筆者は本書の中で、「主として中国から見た日本論・中国論については、中国語を母語とする研究者に将来、論究していただきたい。それによって、日中比較文化学は全き体系性を持つことになる」と言う。日本人による日本の中国観と中国人による中国の日本観、この両者を比較、対照することによって、より日本の中国観が鮮明になる、こうした研究を期待したい。

ここで、故大平正芳首相が一九七二年一月七日に、北京の政協礼堂で行った演説の一部を紹介したい。

由来、国と国との関係において最も大切なものは、国民の心と心の中に結ばれた強固な信頼であります。この信頼を裏打ちするものは、何よりも相互の国民の間の理解でなければなりません。しかしながら、相手を知る努力は、決して容易な業ではないのであります。日中両国は一衣帯水にして二〇〇〇年の歴史的、文化的つながりがあります。このことのみをもって、両国民が十分な努力なくして理解しあえると容易に考えることは極めて危険なことではないかと思えます。ものの考え方、人間の生き方、物事に対する対処の仕方に日本人と中国人との間には明らかに大きな違いがあるやに見受けられます。我々はこのことをしっかりと認識しておかなければなりま

せん。体制も違い流儀も異なる日中両国の間においては、尚更このような自覚的努力が厳しく求められるのであります。このことを忘れ、一時的なムードや情緒的な親近感、更には、経済上の利害、打算の上の日中関係の諸局面を築きあげようとするならば、それは所詮砂上の楼閣に似たはかなく、ぜい弱なものに終わるでありましょう。

日本人が陥りやすい中国観、それによることがいかに危険であるのか、ということを鋭く見抜いたかのような言説である。

はじめにも見たように、筆者は言語の対照研究を基礎に置いて日中比較文化学の構築を目指している。日中比較文化学は、或いは日中対照文化学であるのかも知れない。漢字文化という同じベースを持ちながらも、日本と中国とは全く異なるベースによる文化を有している。筆者により学としての日中比較文化学が構築されんことを願って止まない。本書は中国人研究者はもとより、日本人研究者にも手に取って読んでもらいたい一書である。

(さとう・としゆき 広島大学)